ISSN 2186 − 3989

オンライン国際交流プログラムの実践と課題

大谷　鉄平

Practicies and Challenges of Online International Exchange Programs

Teppei Otani

北　陸　大　学　紀　要
第55号（2023年9月）抜刷

北陸大学紀要
第 55 号（2023 年度）
pp.293 ～ 305
［研究ノート］

オンライン国際交流プログラムの実践と課題

大谷　鉄平*

Practicies and Challenges of Online International Exchange Programs

Teppei Otani*

Received July 7, 2023
Accepted August 10, 2023

抄録

北陸大学国際交流センターでは、2021 年度より、コロナ禍の影響で中断を余儀なくされた姉妹校との対面での交流活動の代替として、オンラインによる学生間国際交流プログラムを年 1 度開催している。第 1 回プログラム「世界の『二次元』事情」は 2021 年 10 月 17 日（日）、第 2 回プログラム「世界の『食』事情」は 2022 年 11 月 5 日（土）に、いずれも「グループ発表とグループ間・フロアとの質疑応答」との形式で開催した。本稿は両プログラムの開催背景・経緯、プログラムならびにふり返り会の内容を総括するとともに、実践の意義ならびに今後の課題についての検討結果を報告する。

両プログラムには海外から多数の参加者があったが、その背景には、いずれも教科書や web で得られる以上のリアルでニッチな情報交換ができたこと、ならびに自国での日本語学習での「日本語を使った交流の少なさ」を解消するための「日本人との交流」への要望を満たす、自主的に「互いに教え、学ぶ」という＜つながり＞を得る機会になったことが考えられる。一方、学内からの参加者の少なさや使用ツールのテクニカルな問題等、今後継続的に検討すべき課題も浮かび上がった。

Key Words（キーワード）: Online（オンライン）, International Exchange（国際交流）, Sister School（姉妹校）,Teams

* 北陸大学国際交流センター　International Exchange Center, Hokuriku University

はじめに[1]

北陸大学（以下、本学）国際交流センターでは、2021 年度より、コロナ禍の影響で中断を余儀なくされた姉妹校との対面での交流活動の代替として、オンラインによる学生間国際交流プログラムを年 1 度開催している。本プログラムは、ICT 技術の発展により現在様々な場所で行われているインターネットを介した国際協働学習（Virtual Exchange; VE、あるいは COIL（＝Collaborative Online International Learning）のような規模の大きい教育活動ではないものの、2021 年度の第 1 回、2022 年度の第 2 回ともに、海外から多くの参加者を認めることができた。一方、学内からの参加者（特に日本人学生）は 2 回ともに数名にとどまり、日本人学生と日本語学習者との間で関心の度合いに温度差があった。

以下、本稿では本プログラムを開催するに至った背景、プログラムの概要ならびに実践の様子、振り返りから得られた課題などを整理したうえで提示し、考察を行う。具体的には、「開催背景」ではプログラム開催に至った背景に加え、本学編入生へのアンケート調査の結果から、「（海外における）文化体験や国際交流体験への要望」を紡ぎ出すことで、本プログラムへの関心との関連性について検討する。「先行研究」では近年活発なオンライン国際交流活動や協働学習について概観し、まだ出発時点ともいうべき本プログラムの今後の方向性について検討する。「2021 年度秋のオンライン国際交流プログラムについて」では、第 1 回のプログラムに関し、開催までの経緯、プログラム当日の概要、さらには振り返り会での学生の声を提示し、プログラムについて総括する。同様に、「2022 年度秋のオンライン国際交流プログラムについて」では第 2 回のプログラムについて報告するとともに、総括を行う。そして、「おわりに」にて、全体を総括し、成果と課題を提示する。

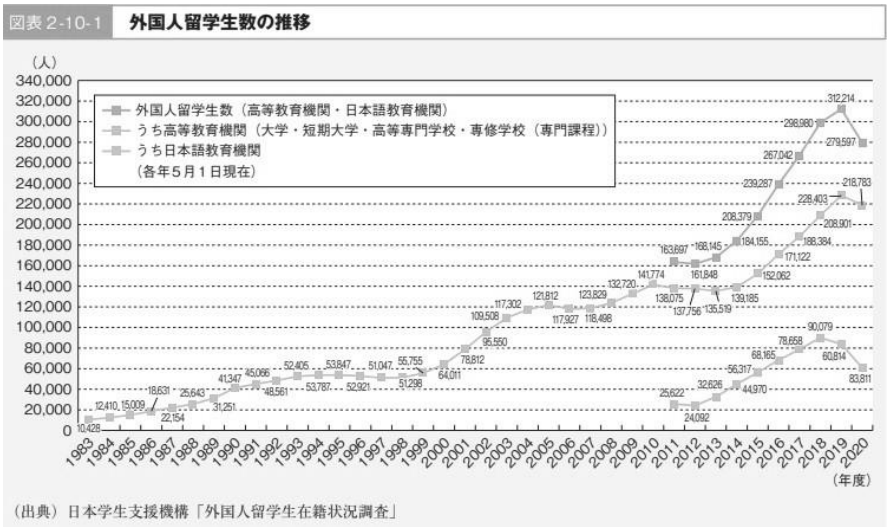
オンライン国際交流の背景

グローバル化が加速する国際社会を見据え、文部科学省は 2008 年 7 月、留学生の受け入れ拡大を目的とした方策である「留学生 30 万人計画」の骨子を策定した。その「背景」には以下のような記述がある。

> 「留学生 30 万人計画」は、日本を世界により開かれた国とし、アジア、世界の間のヒト・モノ・カネ、情報の流れを拡大する「グローバル戦略」を展開する一環として、2020 年を目途に 30 万人の留学生受入れを目指すものです。
>
> （https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1420758.htm
> 最終閲覧日：2023 年 6 月 27 日）

実際、『文部科学省白書 2020』には、日本学生支援機構「外国人留学生在籍状況調査」の結果として、2019 年度に 312,214 名であったことが報告されている（図 1、同 p.314）。しかし、同計画が「目途」とした 2020 年度には、コロナ禍の影響で再び 30 万人を割り込んでいる（同表にある通り、人数は各年 5 月 1 日時点）。周知の通り、これは国内外での移動が世界的に厳しく制限されたことによるものであり、結果的に大多数の日本語教育機関・施設において留学生が「在籍はするが、現地（日本）にいない」状況に陥った。

表 1　外国人留学生数の推移（『文部科学省白書 2020』p.314 より）



（https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab202001/1420041_00009.htm
最終閲覧日：2023 年 6 月 27 日）

この事態に対応するため、同年よりオンラインを活用した授業展開が急速に広まるとともに、従来「現地・対面」であった各種国際交流活動もオンラインに移行した。本プログラムもまた、このような背景を踏まえ、代替的に企画された国際交流プログラムである。

一方、このようなオンライン国際交流プログラムは、日本語学習者における異文化理解に対する要望を充足する、との点で意義があると考えられる。筆者は 2021 年度に担当した「日本語教育学概論Ⅱ」等の科目において、本学編入留学生を対象に簡単なアンケート調査を行った。内容としては、「自国における日本語教育に求めること」「自国における日本語教育の課題」について自由記述で回答してもらうものであり、「日本での日本語教育」との比較について考えてもらうことを目的とした。結果、10 名からの回答があったが、興味深い意見が得られた。以下、その一部を抜粋する。

【要望】
・日本の現代の日常生活の知識を得られる機会が足りない。日本に来てから知ったことがいっぱいある。
・もっと学生たちを交流させて、学生たちに参加度を持たせたほうがいい。
・姉妹校の日本語話者と交流したい。自分が勉強した日本語が本当の日本語かどうか分からないから。
・日本語の面白さや日本文化の魅力をちゃんと学生たちに伝えるべき。
・生の資料を使った授業が足りない。
・「グループワーク」がない。学生はほとんど一人で学んでいる。

【課題】
・現在の教科書はだいたい 10 年前、20 年前のことについてしか書かれていない。
・学生たちの交流が少なく、ほとんど先生が話しています。学生たちは退屈します。
・学校で勉強した日本語では、なかなか日本の方と流暢に話せない。

・日本語でコミュニケーションする機会が少ない。日本語スピーチコンテストがありますが、自由にコミュニケーションするわけではない。
・毎日試験対策の勉強でつまらない。
・クラスの人数が多すぎる。

今回の調査は小規模なものであるが、これらの意見からは「日本語を使った交流の少なさ」「授業で学んだ日本語や日本文化が実態に即しているかへの疑問」との指摘、ならびにそれを解消するための「日本人との交流」への要望が見て取れよう。また、「日本語スピーチコンテスト」のような日本に関するイベントがあったとしても、それに対する満足度が高くないことも注目される[2]。

では、なぜこのような意見が出てくるのであろうか。この点については、以下に掲げる當作（2019）での記述が参考となろう。

> 複雑化する世界で、いろいろな問題を解決し、住みやすい社会を作っていくためには、＜つながり＞を作り、さらにいろいろな人、モノ、情報と＜かかわり＞、社会を＜つくる＞、そして社会、人を＜かえる＞能力を養うことも言語教育の目標となってきている。
>
> （當作（2019）p.6）

つまり、少なくとも上掲の回答を行った学生にとっては、自国での学修が、学生の意識が＜わかる＞＜できる＞（換言すれば、言語「習得」）の段階にとどまり、＜つながる＞などの段階での経験に乏しく、印象に残っていない、あるいは能動的に「日本語で〇〇する」経験が不足している、と感じていると捉えることが可能ではないだろうか。逆に言えば、（コロナ禍、という状況を踏まえ）オンラインで日本と＜つながる＞場をつくり、学生同士が自主的に「互いに教え、学ぶ」ことで国際交流を行う機会を提供することが、このような学生の要望に応えるひとつの策となるのではないだろうか。

このような日本語を学ぶ学生からの期待の存在もまた、本プログラム開催の背景の一端となっているが、以下に述べる海外からの参加者数の多さは、同様の思いを抱いている学生が少なくないことを示唆するものと推察する。

先行研究

教育活動におけるオンライン活用自体はコロナ禍前からある（宮崎（2002）、藤本（2011）など）。しかし、冒頭に述べたように、2020 年度からは急激にこれが拡大し、国際交流や日本語教育の分野でも、教育実践の報告や教育法の提案等々の研究成果において、枚挙に暇がない。筆者が複数通読した限りでは、焦点としては、2020 年時点では「オンライン活用のメリット／デメリット」といった、「対面」との二項対立の視点からの考察もあったが、研究の深化から、福良（2021）、山田・伊藤（2021）での議論をはじめ、「対面／オンライン」各々の学習形態の良さを踏まえた授業デザインの必要性[3]に移行したと思われる。本プログラムは、あくまでオンラインでの国際交流の機会を提供するものであり、「オンライン協働学習」、の点では、「授業」としての長期的な活動の段階には至っていないものの、今後、継続的に＜つながり＞＜かかわり＞＜つくる＞活動へと発展したいとの考えより、そのヒントとなるであろう論考を挙げ、本稿との関連性について述べる。

まず、村田他（2022）「まえがき」には、以下のようにある。

> オンラインの国際協働学習は、21 世紀に求められる、異なる集団のメンバーと協働する力、道具（言語やテクノロジー等）を相互作用的に用いてつながる力、そして自律的に行動する力を高め、変化の激しい時代に、多様な人々と協働して社会を創っていくための姿勢や行動力を養っていく貴重な機会となります。
>
> （村田他（2022）ⅲ）

情報化が高度に成熟した現代では、SNS やオンラインゲームをはじめ、日本国内外の学生同士が気軽に意思疎通を行う web 上のプラットフォームが充実しており、外国語習得を目的とせずとも、その利用が、自然と外国のことばや文化を知る契機となっている。この＜つながり＞は自主的なものであり、「オンラインの国際協働学習」とも通底しよう[4]。

村田他（2022）に収められた諸論考は、すべてが本プロジェクトの今後を見据えたうえで示唆的なものであったが、ここでは特に、同書第 2 章の村田（他）論文、ならびに第 8 章の末松論文を取り上げたい。

まず、前者は 2020 年に日本の大学と海外の大学が行った COIL の実践報告ならびに考察であるが、「デザイン」「協働プロセス」「ふり返り」の過程が詳細に提示されており、本プラムを今後発展・深化させてゆくうえで多くの知見を得ることができた。特に、「2.教員による共働プログラムのデザインの模索（pp.22-34）」では、活動前の準備段階における各種調整が詳述されており、本プログラムが今後、単発的なものでなく姉妹校との長期的な協働学習の場となってゆくうえで示唆的な情報を得ることができた。

一方、後者は「ニューノーマル時代の国際共修」との題目であり、この「ニューノーマル」との文言は、日本のみならず、国際学術大会でも多用されている[5]。同論ではコロナ禍以前からの COIL 型の教育普及を背景とした国際共修のデザインと指導を設計したうえで、SDGs をテーマとした授業実践の報告とその検証を行っている。このうち、「5.おわりに（pp.156-158）」では、オンラインでの国際教育交流への展望に関する考察が提示されているが、オンライン化「前」には問題視されてこなかったオンライン化「後」（＝ニューノーマル）での新たな課題が具体的に提示されており、考慮すべき点を確認することができた。

2021 年度秋のオンライン国際交流プログラムについて

本プログラムは 2021 年 5 月に開催の提案があり、筆者が中心となり企画を進めることとなった。当然のことながら、初の試みであるため、プログラムの構成やテーマ、広報の仕方などを一から決めてゆく必要があったが、なるべく学生による主体的な交流活動となることが望ましいと考え、まずはプログラムの骨子のみを企画（案）とした。すなわち、「本学ないし姉妹校学生による発表」と「質疑応答」というシンプルな構成、ならびに「二次元」とのテーマを提示し[6]、本学学生から有志の（発表希望）参加者を募ったうえで、メンバー同士の発案や話し合いを通じ詳細を決めてゆく、というのが、はじめの企画（案）の時点での方針であった。

なお、この時点での企画に関する打合わせ資料（2021 年 5 月 25 日作成）での開催までのスケジュールは表 3 の通りの予定であった。

表 3　「世界の『二次元』事情」開催までのスケジュール

～7 月末	・発表参加者（グループ）募集＆決定 ・姉妹校グループ決定＆案内
8 月～9 月	・発表準備＆進捗状況の確認 ・広報（国際交流プロジェクト開催の案内（学生が作成））
～9 月末	・発表 PPT 等完成 ・参加者（オーディエンス）締め切り
10 月	・参加グループとの最終調整（発表リハーサル） ・Teams にオーディエンスを含め、参加者登録

学内発表グループのメンバー募集について、国際交流センター内での話し合いを通じ、学内日本人学生に対しては、①「他の国際交流イベントの際にアナウンス」、②「教職員向けメールにて開催の告知と各ゼミ生へのアナウンス要請」、による募集を行った。結果、①については、6 月に、別の国際交流イベントの終了間際にアナウンスし、直後に日本人学生 2 名が名乗り出た（後にこのうち 1 名の友人が誘われる形で発表グループ参加を名乗り出た）。また、②については、1 つのゼミから 3 名の参加があり、計 6 名でのグループによる活動となった。一方、姉妹校へは国際交流センター事務より当プログラムの開催告知及びメンバー募集の案内を各校の関係者にメールしたうえで、当該関係者より学生に通知してもらい、「発表グループとしての／オーディエンスとしての」参加を募った[7]。なお、学生向けの開催告知ならびに趣旨説明に関する案内文を末尾の【資料 1】に掲げたので参照されたい。タイムテーブルは、企画当初は「発表と質疑応答」のみであったが、中国の新進気鋭のアニメーション作家による講演が可能となったことから、2 部構成へと変更している。また、読み手である学生がなるべく「授業」との意識をもたず気軽に参加できるよう文面を工夫するとともに、筆者が個人的に好むアニメキャラクターのスタンプ（公式）を付加することで、「二次元」との側面を強調した。

学内発表グループの準備作業内容は、大きく分けてⅠ.「告知ポスター作成」、Ⅱ.「発表 PPT の作成」とした。夏休みをまたぐため、打ち合わせは出欠表ツール「調整さん（https://chouseisan.com/）」を用いて調整し、ポスター・PPT は Teams[8]、LINE で共有し、全員で作成することとした。また、姉妹校からの「発表グループ」としての参加は、中国（本土）1 校、台湾 1 校、韓国（姉妹校以外）1 校[9]、があった。これらの参加学生には、代表者とのメールのやりとりに加え、開催 1 週間前にリハーサルを実施するとともに、Teams 操作方法の PPT を送付した。

第 1 回プログラム「世界の『二次元』事情」は 2021 年 10 月 17 日（日）に開催され、海外からの参加者は表 4 の通りとなった。結果として計 119 名の参加がある一方、日本人学生（発表グループ以外のオーディエンスとして）は 2 名の参加にとどまった。

表 4　第 1 回オンライン国際交流プログラムへの海外からの参加者

中国（本土）		台湾		韓国		タイ	
教員	学生	教員	学生	教員	学生	教員	学生
1	43	0	38	1	13	0	23

同表における「海外からの」参加者の多さは、注 6 に述べた海外の日本語学習者における「日本語を学ぶ契機」との連関性が考えられよう。これは、申し込み時の Google Form における自由記述としての参加理由をテキストマイニングした結果からも窺える（1 位「アニメ」、6 位「二次元」、10 位「ゲーム」、21 位「マンガ」）[10]。

表 5　KH Coder を用いた参加理由記述での頻出語調査結果

	抽出語	出現回数		抽出語	出現回数		抽出語	出現回数		抽出語	出現回数
1	アニメ	16	10	ゲーム	4	19	イベント	2	28	作品	2
2	参加	11	11	楽しみ	4	20	オーディエン	2	29	子供	2
3	日本	9	12	好き	4	21	マンガ	2	30	自分	2
4	興味	8	13	思う	4	22	以来	2	31	世界	2
5	知る	7	14	事情	4	23	学ぶ	2	32	大会	2
6	二次元	7	15	日本語	4	24	楽しむ	2	33	発表	2
7	今回	6	16	文化	4	25	感想	2	34	文法	2
8	お願い	5	17	学園	3	26	希望	2	35	勉強	2
9	持つ	5	18	交流	3	27	見る	2	※43名回答		

また、「開催背景」に掲げたアンケート調査は同プログラム開催後に行ったものではあるが、（コロナ禍、との現状を加味し）「日本語を使った交流の少なさ」に対応する「日本人との交流」の機会として奏功した、と捉えることも可能であろう。

そして、振り返り会では、本学発表グループより今後の課題として「日本人学生参加の少なさへの対応」「オンラインツールの使用の改善」が挙げられるとともに、第 2 回プログラムでの、「二次元」に次ぐテーマに関する議論が行われた。課題の第 1 点については、「日本人学生が『二次元』（ないし、これをテーマとした国際交流）に関心がない」というわけではない、との意見があった一方、「開催日が本学学園祭の日程（10 月 17 日（日））と重なったことに起因するのではないか」、との指摘があった。第 2 点については、使用ツールのテクニカルな問題[11]について、「即時に質問ができるツールは何か」についての学生間での意見交換があった。そして、次回テーマに関しては、姉妹校参加者からのアンケート結果[12]を勘案したうえで、議論の結果、「食」とのテーマの方針が採用された。

2022 年度秋のオンライン国際交流プログラムについて

本プログラムは前年度に引き続き、2022 年 6 月に企画を提案し、前年度同様、本学学生の発表グループへの参加者を募った。結果、「世界の『食』事情」とのテーマで関心をもち自主的に発表グループとしての参加を希望した日本人学生が 3 名あった[13]。また、今回はコロナ禍の影響で入国が遅れた編入留学生にも声をかけ、5 名の発表グループとしての参加者があった。開催までのスケジュールとしては、前年度の課題であった日本人学生参加者の少なさの要因として「学園祭と日程が重なったから」との指摘を踏まえるとともに、姉妹校の多くにおいて 8 月が休暇期間中であり、実際の参加申し込みが 9 月以降となった点を踏まえ、開催日を 11 月 5 日（土）とし、それに合わせて表 6 のように計画した。

表 6　「世界の『食』事情」開催までのスケジュール

～7 月末	・学内発表参加者（グループ）募集＆決定 ・姉妹校への開催告知・参加募集案内
8 月～9 月	・発表準備＆進捗状況の確認 ・学内向け広報用ポスター（開催の案内）作成
～9 月末	・学内向け広報用ポスター貼り出し ・姉妹校参加者（発表グループ）締め切り
～10 月末	・参加グループとの最終調整（発表リハーサル） ・姉妹校参加者（オーディエンス）締め切り

一方、姉妹校への連絡、学内学生への開催告知ならびに趣旨説明に関する案内（末尾【資料 2】）については前年度を踏襲したが、特に後者については、前年度の課題であった「(Teams のチャットに代わる）即時に質問ができるツールの必要性」から Padlet を用いることとし、その旨を記載した。また、同プログラムへの学生の関心を高めるため、「**今後、留学・旅行をするうえで、旅行ガイドやグルメマップ、教科書にあるような情報だけではもったいない！**」とのコンセプトを強調した（実際の案内文では赤字で強調）。

また、学内発表グループ全体の打ち合わせを通じ、ポスター以外の広報手段として「Teams 上での学部チームへのポスターのアップロード」「発表者の友人への個人的な声かけ」「他の国際交流イベントでの告知」を行うこととした。

開催までの前年度との相違点としては、姉妹校からの発表グループとしての参加希望が大幅に増加したことが挙げられる。具体的には、中国から 5 校の学生グループ、タイから 1 名の発表希望[14]があり、結果として当日のプログラムは以下の通りの 3 部構成となった。

【第 1 部】
①本学日本人学生グループ
テーマ：「郷土料理　～日本海 vs 太平洋～」
②姉妹校（中国）グループ（1）
テーマ：「初めて天津でごまみそを食べた」
質疑応答（1）
【第 2 部】
③姉妹校（中国）グループ（2）
テーマ：「地元の名物料理」
④姉妹校（中国）グループ（3）
テーマ：「中国の辛い文化」
⑤本学編入留学生グループ
テーマ：「留学生からみた日本の食文化」
質疑応答（2）
【第 3 部】
⑥姉妹校（中国）グループ（4）
テーマ：「これこそ中国・中国の食事マナーについて」
⑦姉妹校（タイ）・本学日本人学生合同グループ
テーマ：「日本とタイの郷土料理」
⑧姉妹校（中国）グループ（5）

テーマ:「四川料理は本当に辛いですか？！」
質疑応答（３）

以上の発表テーマを内容面から便宜的に分類すると、「郷土料理（①③⑦)、体験談（②⑤)、真相究明（④⑥⑧)」となり、いずれも教科書に無い情報に溢れるものであった。

なお、第 2 回プログラム「世界の『食』事情」は予定通り 2022 年 11 月 5 日（土）に開催され、海外からの参加者は表 7 の通りとなった（計 50 名)。一方、本学からのオーディエンスとしての参加者は、申し込みとしては日本人が 1 名、留学生が 4 名、であった。

表 7　第 2 回オンライン国際交流プログラムへの海外からの参加者

中国（本土）		台湾		韓国		タイ	
教員	学生	教員	学生	教員	学生	教員	学生
0	45	0	3	0	1	0	1

振り返り会では、前年度同様、姉妹校からの参加学生の事後アンケート結果[15]を提示したうえで、総括を行った。その中で特筆すべき内容を記す。

まず、本学編入留学生グループのメンバーより、率直な感想として、「日本に来て、中国との違いを実感し、それを日本語で伝えることができた」とのコメントがあった。前述の通り、同年においてはコロナ禍の影響により入国自体が遅延した事実はあるものの、逆に言えば、自国と日本との「食」に関する差異への新鮮な経験を、よりリアルタイムな感覚で自国へ提供する機会になったのではないだろうか。また、「開催背景」にて掲げたアンケート調査の結果を勘案すると、このような機会が、海外で日本語を学ぶ学生の【要望】に対応し得る、教科書に無い情報で主体的に＜つながる＞契機となることが推察される。

また、前年度同様、本プログラムでの問題点・改善点すべき点について意見を出し合った。これについては、以下、【前年度から改善された点】【前年度と同様の課題】【新たな課題】として整理し、提示する。

【前年度から改善された点】
・チャット機能の代替：Padlet の使用により、発表中でのオーディエンスの参加が可能となった（ただし Teams、Padlet 両方のリンクを開く必要がある)。
・開催時期：11 月とすることで、姉妹校からの発表グループとしての参加が増加した。
【前年度と同様の課題】
・本学学生のオーディエンスの少なさ:「開催日が本学学園祭の日程と重なったこと」が要因ではないことが分かった。
・使用ツールのテクニカルな問題：Padlet の使用によりチャット機能の代替となったが、Teams、Padlet 両方のリンクを開く必要があることが煩雑。
【新たな課題】
・発表グループ数:「多すぎてすべての内容を覚えきれない」との意見がある一方、「せっかく応募してくれた姉妹校の学生を断るのは難しい」との意見もあった。

このうち特に「本学学生のオーディエンスの少なさ（特に日本人学生)」については、本学発表グループが試行錯誤しポスターを作成した経緯もあり、ほぼすべてのメンバーから

問題点としての指摘があった。しかしながらその理由の解明ならびに改善案の提示には至らなかった。ただし、オーディエンスとしての参加も自主的なものであるため、多くの学生の参加自体を目的化することは本プログラムの趣旨から逸れるであろう。

最後に、前年度は中国のアニメーション作家による講演もあったことから、「発表・質疑応答」以外に望まれる内容について話し合った。その中で、「発表側／オーディエンス側間の距離を感じる」との理由から、複数の学生から「はじめに全体でアイスブレイクの時間を設けてはどうか」との提案があった。しかしながら、小グループで自由に話し合う時間を設けても、ゲスト参加者はブレイクアウトルーム機能を使用することができない、という前掲の「テクニカルな問題」が存在する。よって、この点については次年度の検討課題として持ち越すこととなった。

おわりに

本稿では、本学国際交流センター主催により 2021 年度より 2 度開催された、姉妹校との学生間オンライン国際交流プログラムの実践を総括するとともに、開催の意義・課題ないし今後の発展のための先行研究との連関性について考察した。本プログラムは、「授業」ではないため、村田他（2022）に収録されたような VE（あるいは COIL）での諸実践には至っておらず、「日本人学生（ないし日本へ留学している学生）と現地にいる姉妹校の学生が＜つながる＞経験を、単発的な交流を行った」段階である。一方、両プログラムへの海外からの参加者の多さは、コロナ禍という特殊な事情もあろうが、「開催背景」に提示したアンケート調査の結果も踏まえ、海外で日本語を学ぶ学生の【要望】に応える機会であったことを示唆するのではないかと勘案する。

また、現地学生との直接的な交流は、情報化社会が高度に発展した現代であれ、web 上で得られる以上のリアルでニッチな情報を得られる機会となる。このような情報を、自主的に、互いに「教え、教わり合う」経験が、本プログラムで実感されたことは強調したい。

今後の課題としては、本イベントの継続を念頭に、2021 年度ならびに 2022 年度でのオンライン国際交流プログラムでの改善案を、参加学生を中心に考えてゆくことが挙げられよう。これについては、後者の発表グループメンバーを中心に、「国際交流同好会」が結成され、新たに日本人学生、編入留学生の新規加入もあった。今後、同同好会での打ち合わせを重ね、さらにブラッシュアップした＜つながる＞機会を姉妹校の学生と共有したい。

注

[1] 本稿は日本比較文化学会第 44 回全国大会・2022 年度国際学術大会（2022 年 5 月 21 日、山形大学）での口頭発表「オンライン国際交流プログラムの実施と課題」、ならびに日本比較文化学会第 34 回九州支部大会（2023 年 2 月 18 日、福岡女学院大学）での口頭発表「オンライン国際交流プログラムの実践と課題（2）―昨年度との比較を中心に―」の内容を加筆・修正したものである。

[2] これに関連し、編入留学生との私的な会話の中で「自国では日本文化についてどのように学んだか」と問うたところ、「大教室での講義形式だった」「異文化理解のイベントはあったが、強制参加だった」などの意見が得られた。

[3] 福良（2021）では、日本語上級レベルの学生を対象としたオンライン授業へのアンケート調査を行い、「（学生は）同期型・非同期型それぞれに学習の意義を見出していることがわかった」と報告した。また、山田・伊藤（2021）では、「対面／オンライン」との学習形

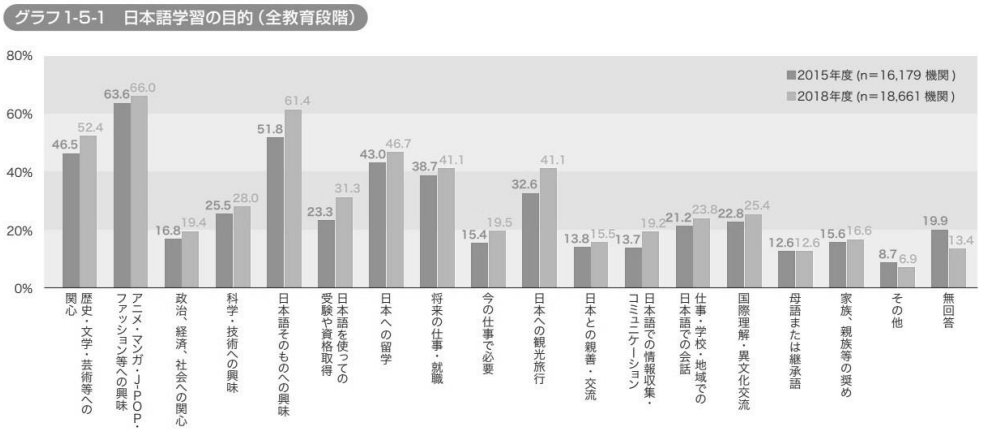
態の二項対立を否定し、「学習内容を考慮し、対面／オンラインの学習環境だからこそ最も成立する授業のデザイン」構築を教員側が工夫することの必要性を主張している。

[4]例えば、オンラインゲームでは、同論の「異なる集団のメンバーと協働する力、道具（言語やテクノロジー等）を相互作用的に用いてつながる力、そして自律的に行動する力」が自然と養われると考える。具体的には、e スポーツとして話題となった「LOL（LEAGUE of LEGENDS https://www.leagueoflegends.com/ja-jp/（最終閲覧日：2023 年 6 月 30 日））」、各種 FPS（First-person shooter）ゲーム、ないし「原神（https://genshin.hoyoverse.com/ja（最終閲覧日：2023 年 6 月 30 日））」を代表とした RPG ゲームでの協力 or 対戦プレイが挙げられる。

[5]直近では、筆者も招待発表を行った 2023 年度台湾応用日語学会による国際学術研討会（2023 年 4 月 29 日、文藻外語大学）での研討会主題に「新常態(New Normal)時代下的日語教育和日本研究」とある（https://sites.google.com/view/2023-wenzao-icaj/%E9%A6%96%E9%A0%81?authuser=0 最終閲覧日：2023 年 7 月 1 日）。

[6]初の試みであったため、テーマ設定は筆者が行った。理由は、海外の日本語学習者における「日本語を学ぶ契機」として、「漫画・アニメ・ゲーム」が多いためである。国際交流基金「2018 年度　海外日本語教育機関調査」p.25 によると、「2018 年度調査において、世界の日本語教育機関が在籍する学習者の学習目的・理由として挙げた項目のうち最も回答が多かったのは「マンガ・アニメ・J-POP・ファッション等への興味」（66.0%）であり、実に全世界の三分の二の機関が挙げている。続いて二番目に多いのは「日本語そのものへの興味」（61.4%）であり、三番目には「歴史・文学・芸術等への関心」（52.4%）」とある（表 2）。

表 2　日本語学習の目的



（国際交流基金「2018 年度　海外日本語教育機関調査」p.25）

[7]ただし、姉妹校の多くは、7 月下旬は夏休み期間中（かつ、コロナ禍のため学生が登校できない状態）であったため、実質、参加申し込みが始まったのは 9 月からとなった。

[8]前掲の村田（他）論文にも「テクノロジーの調整」に関する記述がある（p.32）が、本プログラムでのオンラインツールとしては Teams を用いた。後述するように同ツールを用いたオンライン活動には現状（2023 年 7 月現在）、制限上の困難を伴うが、Zoom を用いなかった理由としては、「本学のオンライン授業が基本的に Teams を用いている」「姉妹校の地域によっては Zoom が使用できないところがある」点が挙げられる。

[9]筆者が韓国で勤務していた頃からの知人が勤務する国立大学である。

[10]回答者数 43 名。KH Coder による結果（頻出語、2 回以上出現した語のみ）である。

[11]具体的には、Teams では、ゲストとしての参加者は「ブレイクアウトルーム（＝少人数でのグループ）への参加ができない」「チャットへの書き込みができない」との制限がある。特に後者は、発表中でのオーディエンスからの率直な反応（各種動画サイトでの「弾幕」のようなコメントも含む）も積極的に受け付けるための対応が指摘された。
[12]13 名からの回答があった。質問項目としては「次回の国際交流プログラムについて希望する内容」であったが、抜粋すると「美味しい食べ物」「世界の osmu コンテンツ」「文学 料理など」「Kahoot とかのゲームを備える」「I hope can listen about how to make animation next time.」（以上、原文ママ）などがあり、振り返り会でも、「料理」「二次元コンテンツ『自体』」への関心もあるのではないか、との議論があった。
[13]契機としては、2 名は、2021 年度同様、他の国際交流イベントでの案内による。その他の 1 名は筆者担当の授業内での紹介からの参加希望。いずれも日本人学生である。
[14]当該学生は、本学日本人学生と交流があり、前年度もオーディエンス側で参加した。
[15]「日中の比較について深い情報を知ることができた」「料理や会食の際のルールが学べたのが面白かった」「日本の文化でも知らないことを吸収できたので良かった。いろんな人との交流が楽しかった」「協調性を鍛えることができ、楽しめました」「じつは前回は参加者として入りましたが、今回は発表者で参加しました。いろいろがありましたが！楽しかったです。料理のことを聞いて、ぺこぺこになりました（笑）」等（原文ママ、抜粋）。

参考文献

當作靖彦「ネットワーク時代の言語教育・言語学習」當作靖彦（編）『ICT×日本語教育－情報通信技術を利用した日本語教育の理論と実践』,pp.2-21(2019).
福良直子「同期型・非同期型併用による上級日本語教育の実践：学部留学生を対象とした「総合日本語」の授業の振り返りから」『多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集』,25,pp.47-54(2021).
藤本かおる「遠隔教育における初級日本語教育での web 会議システムの利用とその考察―インドとの遠隔対面授業と日本国内の対面授業の比較を中心に」『日本 e-Learning 学会誌』,11,pp.12-17(2011).
宮崎里司「接触場面の多様化と日本語教育－テレビ会議システムを利用したインターアクション能力開発プログラム」『講座日本語教育』,38,pp.16-27(2002).
村田晶子（編著）『オンライン国際交流と協働学習』くろしお出版,2022.
山田智久・伊藤秀明編著『オンライン授業を考える 日本語教師のための ICT リテラシー』くろしお出版,2021.

資料

（左）資料１　オンライン国際交流プログラム「世界の『二次元』事情」案内文
（右）資料２　オンライン国際交流プログラム「世界の『食』事情」案内文

学園祭国際交流プログラム（北陸大学国際交流センター）

「世界の「二次元」事情」（形式：シンポジウム（Teams））

○日程：10 月 17 日（日）　13：00～15：00（日本時間）　※変更の可能性あり
○目的：アニメ・ゲーム・漫画などをテーマとしたグループ発表と全体討議により、国際交流を図る。
○参加費：無料
<テーマ例>
・私の国のアニメ（or ゲーム）事情の紹介・私の国のアニメ（or ゲーム）の変遷・私の国のアニメ（or ゲーム）業界の今・私たちが思う日本の「声優」・二次元の今後・若スポーツ…などなど。
　　など。条件は「日本語で発表」「二次元に関するもの」。
※PPT 作成、発表内で動画を流す・web ページを紹介する、なども O.K
○タイムテーブル

【第１部】
開会・趣旨説明（5 分、司会）
グループ A 発表（15 分（～18 分））
グループ B 発表（15 分（～18 分））
グループ C 発表（15 分（～18 分））
グループ D 発表（15 分（～18 分））
討議準備（2 分程度）
全体討議（約 30 分程度）
【第２部】
中国のアニメーション作家による特別講演（1 時間程度）
総括・閉会（5 分、司会）

○発表グループ（3～5 名程度目安）
①○○大学学生　②提携校 A　③提携校 B　④韓国：○○大学校学生
↑発表者募集中！！　（こんな学生さんを探しています）
☆アニメや漫画、ゲームが大好き！！
☆海外の二次元事情が知りたい！！
☆二次元をテーマに国際交流を体験したい！！

○参加申し込みについて（奮ってご応募ください）
・発表者
・参加者（オーディエンス）
※発表者は先着順です。個人でも、学校単位でも構いませんが、応募者多数の場合、締め切る場合がありますので、早めのご応募をお願いします！
申し込み締め切り：発表者、参加者ともに、９月５日（日）

北陸大学国際交流センター主催
秋のオンライン国際交流プログラム

第２弾！

世界の「食」事情

☑「日本の食べもの」といえば「すし」「天ぷら」「お好み焼き」？
☑中国の天津には「天津飯」という料理がある？
☑韓国人はみんなが辛いものが好き？
→どんな、海外の「食べもの・飲みもの」への固定観念や勘違い、ありませんか？
☑韓国ではカレーは混ぜるのが一般的だけど、日本では混ぜないのが一般的。なぜ？
☑トマトは果物？野菜？
☑やってはいけないテーブルマナーって、なんだろう？
→どんな、海外の「食文化・食習慣」の違いに、興味はありませんか？

☆このプログラムでは、北陸大学と特林校のみなさんとのオンラインでの交流を通じ、海外での「食」事情についての情報交換を行います。今後、留学・旅行をまるうえで、旅行ガイドやグルメマップ、教科書にあるような情報だけではもったいない！みなさんで教え合い、そして、教わり合いましょう！

○日程：11 月 5 日（土）　13：00～15：00（日本時間）　※変更の可能性あり。
○形式：ワークショップ（Teams での発表・質疑応答、Padlet を用いたチャット形式での質問も可）
○参加費：無料
<テーマ例>
・「私の地元の家庭料理」「今話題のスイーツ」「海外でも作れる簡単和食レシピ」「やってはいけない箸の使い方」「韓国人もびっくりの辛いもの特集」…などなど。条件は「日本語で発表」「『食』に関するもの」。
○タイムテーブル（発表グループを 4 とした場合、約 2 時間）
開会・趣旨説明（5 分、司会）
グループ A 発表（15 分（～18 分））
グループ B 発表（15 分（～18 分））
グループ C 発表（15 分（～18 分））
グループ D 発表（15 分（～18 分））
全体討議（約 30 分程度。グループ間質疑応答／フロアとの質疑応答）
総括・閉会（5 分、司会）

<参加申し込み（発表者）>
※発表者は先着順です。個人でも、友達同士でも構いませんが、応募者多数の場合、締め切る場合がありますので、早めのご応募をお願いします！ 現在、発表者大募集中！
申し込み締め切り：９月 30 日（発表者）／10 月下旬（オーディエンス）
申し込み先：添付の Google Form
問い合わせ先：